

(川崎さん)

ば、良いのになと、その時は、思いましたけど、結局誰も来なかった。心細かったと聞いていたので、その後に努力義務となった個別支援の計画の策定で、同意しますか？ 同意しませんか？ と言われた時に、仮に同意したところで、自分としてはまた、同じじゃないか、というのが脳裏にありましたので、お役所の定めたルールにしなければ、後々の支援に支障がありますか、とお伺いしたけれども、そこも何も考えてない。その後のことも考えてない。

ただ印として、「この家には障害者がいますよ」という把握するだけのものになってしまっているのではないか、と思い巡ったので、「それだったらいいや」という感じでね。止めた経緯があって、父親が亡くなってから、自分にも何年かに一度そういうお話が来ていますが、その時も登録していません。してあったら来た、と思いますか、という質問もいただきましたが「わかりません」と言いました。

今の自分たちの地域、石川県の中で能登北部の地域は高齢化率が6割以上になっていますので、過疎化が進んで働ける・動ける人数の少ない中で障害者がいて助けを求める。あるいは、それ以外のことで力を借りる、というのは非常に難しい状況にあると思います。

それに加えて、今、国の方では施設から地域にと、施設入所生活から地域で生活できるように移行しましょう、という動きが出てきていますが、こういう過疎化・高齢化の時代に地域で生活、もちろん自分の生まれ育った地域で生活する。あるいは自分の好きな住みたい地域で生活することは、良いことなのでしょう。

けれども、それをサポートいただける社会資源が何なのか、というところが何かすごくぼやけていて、そんな状況で災害時における個別支援、支援という言葉自体が誰かに支援していただくという人なのか。あるいは物なのか。あるいは何なのか、不安になるような今回の地震だったと思いますね。

だから、ハンディがあろうがなかろうが、ノーマライゼーションとか、今言われている共生社会であるとかを、考えるベースになるべき部分の大切な1つの要素